

「毎月抄」私注（二）

細谷直樹

○私注の下に添えた（二）は『小樽商大人文研究』第三十八輯所載の同題の続稿を意味する。

○本文は日本古典文学大系『歌論集』所収の伝道増法親王筆本による。

○私注を加える語句の下の数字は右『歌論集』のページ数と行数である。一一六・三とあれば、一一六ページの三行目を示す。

勘申候し十躰（一一七・七）

その人のために「十躰」を勘案した相手と『毎月抄』を授与する相手が別人であり、以前に自分が「十躰」を勘案したことを『毎月抄』を授与する相手に伝えるだけなら、「勘候し十躰」でよいはずなのに、「申」が添えられているのは、両者が同一人であり、「以前に（あなたのために）勘案いたしました十体」の気持からなのだ、すなわち「申」は勘案した相手に対してへりくだる気持から添えられたのであり、「十躰」を勘案した相手と今筆執る『毎月抄』を授与する相手が別人だったら、「十躰」を勘案したことに「申」を添えて、このことを『毎月抄』を授与する相手に伝える必要はないはずだ、と解すれば、「十躰」は『毎月抄』を与えた相手のために定家が勘案したこと

になり、この「十躰」を現存『定家十体』だと考えれば、『定家十体』と『毎月抄』は同一人に定家が授与したことになる。しかし、ここは、「十躰」を勘案した相手と『毎月抄』を授与する相手は別人であり、「勘候し十躰」でもよいところを、『毎月抄』を授与する相手に対して一段と改まった態度から丁寧な「自分が以前に考えた」ことを伝えるために「申」を添えたものと解するのが正しかろう。動詞としての「申す」は元来は「言上する」の意の対象尊敬語であったが、それが「言う」の意の改まった言い方、へりくだった言い方にも使われた（先人申をき候し庭訓）△一二六・3√の「申」はこの意味）。補助動詞としての「申す」も右の変移に依じて、「申す」の上接語の働きかける対象を高める尊敬表現から、上接語に謹みへりくだる気持をこめる丁寧表現にまでわたって用いられるに至った。ここの「申」は補助動詞としての後者の用法と考えるべきであろう。『定家十体』と『毎月抄』とは同一人に定家が授与したものとまず考えがたかろう。ただし、『毎月抄』に記された十体名と『定家十体』のそれが一致し、しかも、それは「勘申候し十躰」（「し」は経験回想の助動詞）である点からして、『毎月抄』の筆者（定家と考えて間違いないものと思う）が『定家十体』（現存のそれと原形のそれとの関係には問題もあるが、——拙稿「定家十体論」△国語国文・昭和32・5√参照）を自作としていることは明らかである。

麗様（一二七・7）・濃様（一二七・10）

表章・伊藤正義校注『金春古伝書集成』が『五音十体』と名付けた禅竹の伝書の一本（観世宗家蔵、室町末期筆）が「麗躰」の「麗」に「ウルワシキ」、「濃躰」の「濃」に「コマヤカ」と振仮名を付けているので、「麗様」は「レ

イヤウ」ではなく、「ウルハシキヤウ」、「濃様」は「ノウヤウ」ではなく、「コマヤカナルヤウ」であったかとも思われる。

いりほがの入くり哥（二二八・六）

長明の『無名抄』の「近代歌体」の条に「あるは又おぼつかなく、心こもりてよまむとするほどに、はてにはみづからも心えがたく、又無心所着になりぬ。加様のつらの歌は幽玄のさかひにはあらず。げに達磨とも是をぞいふべき。」（『歌学大系』三卷三一—三二二ページ）とあることを「あまりに又ふかく心をいれんとてねぢすぐせば、いりほがの入くり哥とて、堅固ならぬすがたの心えられぬは、心なきよりはうたてみぐるしきことにて侍る。」と思ひ合わせると、「いりほがの入くり哥」の又の名が「達磨（歌）」であったことを知る。

景氣の哥（二二九・三）

印象鮮明な自然の景色が、目の前に浮び上るように、さらさらと詠んだ歌。石村正二氏は「有心小考」（『国語』昭和27・7）の中で、「景氣の歌」について、次のように説かれている。

景氣とはものの表象であり、時代の用法に即していえば、自然の景象が彷彿するように直観的に現したものを指すのである。かような景氣は一般的には——別して俊成や長明においては——余情的なものと考えられて高い価値を与えられて来たし、定家においても必ずしも軽んぜられたとは言えないけれども、彼はこれを縹緲たる景趣において捉えず、感覚的な明確な輪郭において捉えた如くである。その意味で心深しに對立するものと

して、もの・の・世界であり、さらさらと詠みうる見たままの歌と考えたのであろう。定家は十体の中に見様なる風体を立てている。これはやはり対象をそのまま写す叙景歌と思われるが、価値をはなれた風体論の一つとして考察されて居り、十体の上に亘る有心に包摂されるのであってみれば、感覺的表現を通じて象徴される心の深さが要請されねばならなかった様式と思われる。その意味で同じ写景ではありながら心や姿の充実と洗練を要しなかった価値的にも低次の概念たる景氣の歌と分たれたのであろう。(三五ページ)

有心体の歌がなんとしてもよめない場合の便法として「景氣の歌」をよめと定家は教えたが、これと同じようなことを、俊惠もまた、長明の『無名抄』の中の「俊惠歌すがたを定る事」の条で教えている。

歌には故実と云事ありき。風情をおもひえぬ時、心のたくみにてつくりたつべきやうをならふ也。一には、させる事なけれど、たゞ詞につゞき、にほひふかくいひながしつれば、よろしくきこゆ。

風のおとに秋の夜ふかくねざめしてみはてぬ夢の名残をぞ思(『歌学大系』三卷三二四ページ)

申さば、すべて詞にあしきもなくよろしきもあるべからず、たゞつゞけがらにて、哥詞の勝劣侍べし(二三〇・一〜二)

御説明申しあげるなら、全く詞にはわるい詞もなく、よい詞もあるはずがなく、ただ詞のつゞけぐあい、歌の詞のすぐれているか劣っているかが決まるのでございましょう。詞そのものに、よい詞わるい詞が固定してあるのではなく、「つゞけがら」によって、同じ詞が、よい詞にもわるい詞にもなるのだという、この用詞に対する鋭い理

解は、そっくり順徳院の『八雲御抄』の「用意部」にも記されている。

歌はたゞ詮ずる所、古き詞によりて、その心をつくるべし。いはゞよき詞もなし、わるき詞もなし。唯つゞけがらに善悪はあるなり。萬葉集にあればとて、よしゑやし、はしけやし、などいひ、古今によめればとて、ちるぞめでたき、わびしらに、などいへる詞、よむべきにあらず。かのたぐひ、これに限らずおほし。(『歌学大系』三卷七五ページ)

同じ理解は俊成の判詞にも見当る。『六百番歌合』の恋二、十三番「待恋」の右歌「宵の鐘を聞きすぐすだに苦しきに鳥のねを鳴く袖の上かな」を、左方が「右歌、苦しきに、弱く聞ゆ。」と難じたのに、俊成は判で、「苦し、わびしなどいふ詞は、言ひかなへつる時は、弱くしも聞えざるものなり。」と弁じている。溯れば、『俊頼髓腦』の次の記事に到り着こう。

うたの詞に、らし、かも、いも、べらなり、まにく、いまはたゞ、みわたせば、こゝちこそすれ、わびしかりけり、かなしかりけり、つつ、ぞも、これらはおぼろけにてはよむまじと古き人々申しけりとぞ承りし。これ又古き歌になきにあらず。

わが恋はむなしき空にみちぬらし思ひやれどもゆくかたもなし

霜のたてつゆのぬきこそよはからし山のにしきのおればかつちる

み山にはあられふるらし外山なるまさきのかづら色づきにけり

是等らしとよめれど、あしうも聞えず。

春がすみ色のちぐさに見えつるはたなびく山の花のかげかも

いはそゞぐたるみの上のさわらびの萌えいづる春にあひにけるかも

天の原ふりさけみれば春日なるみかさの山にいでし月かも

これらにて心をうるに、よくつゞけつればとがとも聞えず。あしうつゞけつればとがともきこえ、あしうつゞけつれば、花ざくらといふも、てる月といふも、きこくこそはおぼゆれ。……つゞき聞きにくくとりなしつれば、げにあやしともや申すべからむ。(『歌学大系』一巻一九六一—一九七ページ)

なお、「申さば、すべて詞にあしきもなくよろしきもあるべからず」の自信に充ちた断定を、「すべてよむまじきすがた詞といふは、あまりに俗にちかく、又おそろしげなるたぐひを申侍べし。」(一二七・1、2)と思ひ合わせると、詞そのものにあしきもよろしきもないのは、「和国の風」(一二七・14)である歌の「雅」の枠内でのことであることを知るのであり、この枠外の「俗」の領域に逸脱したら、話は異なるわけである。

さるにつきて、なをこの下の了見、愚推をわづかにめぐらし見侍れば、可ニ心得一事侍にや (二三〇・7、8)

そこで、やはり、以下に述べる(私の)考えに、至らぬ推考をやつとのことのでめぐらしてみますが、(あなたが)よく覚えておかなくてはならぬことがあるかも知れません。「了見」は「了見に」の気持。「なを(ほ)」が書き付けられたのは、「さるにつきて」に留意すると、「この下の了見(料簡)」には、「愚推をわづかにめぐらし見侍る」ものだから、あなた(『毎月抄』を授与する相手)が「可ニ心得一事」などあろうはずはない。でも、これは単なる私見ではなく、「或人」(二三〇・4)も言い、「古今序」(二三〇・6)にもこの意味のことが記されていることなの

で、「やはり」の気持からであろう。「愚推をわづかにめぐらし見侍れば」は挿入句。

哥の中道（一三一・一）

歌における中諦たひの道。歌の最高歌体、他に卓越した歌体、の意で、ここでは「秀逸の躰（一三一・二）」に相当する。「愚意にも、一切のわざは強からむをもつてよろしきとすべきにやと覚え侍れば、拉鬼体を歌の中道と申すべしやとぞ思ひとり侍る。」（『三五記』△『歌学大系』四卷三二八―三二九ページ▽）、「歌・連歌も仏の三身のごとく、法ほつ・報ほう・応おうの三身、空くう・仮け・中ちゆうの三諦たいのすがたの句あるべし。……理ことわりすくなく、幽遠ゆうえんに、けだかき句は、法身の当分なるべし。智恵にても、稽古にても、至りがたかるべし。されども、修行工夫たけたる其人の眼には明らかなるべしとなり。中道ちゆうだう実相の心にあひかなへるとなり。」（『ささめごと』△古典文学大系『連歌論』二〇一―二〇二ページ▽）の用例からすると、「中道」は、天台宗で説く空・仮・中の三諦のうちの「中諦の道」の意から最高の体、他に卓越した体、の意に転用されたことを知る。（参考）「空諦」は、すべての存在は実体はなく、空無のものであること、「仮諦」は、すべての存在は実体がなく、縁によりて仮に生じ、存在するものであること、「中諦」は、すべての存在は空・仮を超えた絶対なものであって、その本体は言葉や思慮の対象ではないこと、を意味する。

それは不覺の事にて候（一三一・13〜14）

それは間違ったこととございます。「無文なる哥の、さはく〜と讀て、心をくれ、たけある」（詞の織りなす美しさ

をもたない歌で、△何ら沈思することなく▽すらすらと詠んで、△詠歌対象の本意にまで滲透する▽詠者の心の深まりはさして見られず、外見だけが堂々とした歌」と「萬機をもぬけて、物にとどこほらぬが、この十躰の中のいづれの躰とも見えずして、しかも其姿をさしはさめるやうに覺て、餘情うかびて、心なをく、衣冠たゞしき人を見る心ちする」(△縁語、掛詞などの▽あらゆる修辭技法をも突き抜けて、特定の修辭技法にこだわることのない歌で、今述べた十体△幽玄様、事可然様以下の十の歌体▽の中のどの体に該当するとも思われないうで、そのくせ、その十の歌体を包摂しているように思われて、余情が浮んで、詠者の真実な感動が詠歌対象の中に、いわば直線的にそのまま詠み込まれていて、衣冠をきちんと着用した人を見るような氣持のする歌)とは、一見外見は似た歌のように思えるかも知れぬが、前者は有文に對立する無文であり、後者は有文を突き抜け、これを超えた無文であり、質的に相違する。なお、「無文なる哥の、さはく」と讀て、心をくれ」は「俊惠はたゞ哥はおさなかれと申て、やがて我哥にも、そのすがたの哥を秀逸とは思たりげに候けるとかや」(一三一・2、4)をダブラせており、「たけある」は「俊頼はえもいはずたけたかきをよろしと申ためり」(一三一・4)をダブラせていよう。

かたはらより (一三一・16)

脇から。「いまとかくもてあつかふ風情」ではないところから、の意。現代流行の趣向とは無關係なところから。

やすくとして (一三一・16)

ここの「やす／＼として」は「詠吟事きはまり、案性すみわたれる」（詠吟した場合の調べの美しさがもうこれ以上は一步も進めないというところまで完全に整い、心のはたらきが澄みわたった）その意識を超えた澄心の境位での「やす／＼として」であり、「無文なる哥の、さは／＼と讀て」（一三二・13）の「さは／＼と」とは異なる。

かすかなる景趣たちそひて（一三二・3）

かすかな景象の趣が一首に立ち添って。「かすかなる」は、渺茫深遠な。言葉では捉えがたいほどはるかにして深い、の意。「景趣」は、ここでは景象の趣、景象が伴う陰影が意味されていよう。単なる「景趣」ではなく、「かすかなる景趣」が立ち添うのは、その景趣が「（心）ことばのほかまであまれる」（一三二・1）余情の中で浮び添うものだからであろう。

天性病にかされぬほどの哥になりぬれば（一三四・1）

もともと、その本来の性格からして、歌病に犯されないほどの秀歌ということに（衆目の一致するところで）決定してしまふと。「病にかされぬほどの哥」は、歌病に該当しても、それによって、その歌の価値が損われないほどの歌の意であるが、そうした歌病をも問題にしない絶対の秀歌は、もともと、秀歌であることその本来の性格からして、歌病には犯されないのだ、の気持から「天性」の語が差し加ったのであろう。「天性」は生れつき。もともと、その本来の性格からして、の意。「天性病にかされぬほどの哥は」で意味が通ずるところを、「になりぬれば」とあるのは、そうした秀歌は始めから秀歌であったのではなく、なるのであり、皆が決めて、そうなること

ろに秀歌の性格があるのだ、とされてのことであろう。秀歌のもつ価値は、その歌自体が本来具備する価値であるよりは、衆口が具備させた価値である。「人口に膾炙する」ということが秀歌に不可欠の条件であった点が思い合わされよう。秀歌の性格については、田中裕氏論「秀歌と定家歌論」(『中世文学』昭和39・5)参照。

雲・風・夕ぐれなどやうの詞は、いくつよめらんも、よもくるしき事は候はじとおぼえて候。それも、よからん哥のすてがたからんは、いくらも同(じ)ことばをよみすへて、さて候なん。無下のゑせ哥のみだりがはしくおなじ詞をさへよみませたらんは、いとよからじにて候(一三四・7、10)

雲や風や夕暮などのような詞は、いくつ詠んだとしても、それは、よもや気にすることはありますまいと思われます。その同じ詞をいくつ詠んでもかまわない場合にも、よい歌で落しにくいようなものは、何度も同じ詞を詠みすえても、そのまま許されましようが、全くお話にならないくだらない歌で、乱雑に同じ詞までも詠みませているようなものは、あまりよくあるまいと思われることでございます。「それも」は「雲・風・夕ぐれなどやうの詞は、いくつよめらんも、よもくるしき事は候はじとおぼえて候」を承け、その同じ詞をいくつ詠んでもかまわない場合にも、の意。すぐ下の「よからん哥のすてがたからんは、いくらも同(じ)ことばをよみすへて、さて候なん」が大きく挟み込まれたかたちで、「それも」は「無下のゑせ哥のみだりがはしくおなじ詞をさへよみませたらんは、いとよからじにて候」につづく。

得たる躰を地盤として正位によみすへて(一三五・9)

稽古でその身に修得した風体を基礎にして、その風体を「直く正しき」風体から絶対にはずれないようにしっかりと詠んで。「得たる躰」は、身につけた風体。後天的な努力稽古でその身に修得した風体、の意。「正位」は正しい位であるが、ここは、「いづれの躰をよまんにも、なをくたゞしき事は、わたりて心にかくべきにこそ。」(一三五・7~8)の「直く正しき」の語の意味する位であり、この「正位」に「よみすへ(据ゑ)て」とは、「得たる躰を地盤として」、その得たる躰を「直く正しき」風体(詠者の真実な感動がその歌にそのまま詠み込まれており、技巧のための技巧に陥ることのない風体)から絶対にはずれないようにしっかりと詠んで、の意であろう。「なをくたゞしき事」については、『小樽商大人文研究』38輯所載の本稿と同題の拙稿一五一―一六ページ参照。

正路(一三五・10)

正しい路。「いづれの躰をよまんにも、なをくたゞしき事は、わたりて心にかくべきにこそ。」(一三五・7~8)の「直く正しき」に則った路。

物をもたかくあんど(一三五・13)

歌の着想をもみごとに思いめぐらし。「物」は「案ずる」対象を漠然と指した語であるが、具体的には歌の着想が意味されていよう。「たかく」は上に「われにこえて」といったから「たかく」といったままで、秀れて、みごとに、の意。

かくしれるよしには申侍れども、愚老もつやくわきまへえたる事侍らずこそ。さりながらさしも卑下すべからず。去元久比、住吉參籠の時、汝月あきらかなりと冥の靈夢を感じ侍しによりて、家風にそなへんために明月記を草しをきて侍事、身には過分のわざとぞ思給る（一三六・10～13）

このように、（私自身は、歌の優劣を）わかっているふうには申しますが、（実のところ）私自身も全然わかってゐることがあるわけではございません。ではありますが、そんなに卑下してはならないことです。（と申しますのは、）過ぎし元久の頃、住吉神社におこもりした時、「汝の頭上に月は皓々と照らしているぞ」と、冥々のうちの明神のおさとしの夢を感じましたので、歌道家としてのわが家の作風が仏の道からはずれないために、明月記を書き置いてありますことは、自分には分に過ぎたしわざと思ひます。

「さりながらさしも卑下すべからず」、こう記すとき、定家の心中には、次に書き留めた住吉參籠の折の冥の靈夢が思い浮んでおり、始めは「去元久比、住吉參籠の時、汝月あきらかなりと冥の靈夢を感じ侍しなり。」或は「……感じ侍しなればなり。」とでも筆を進めるつもりであったろうが、「……冥の靈夢を感じ侍しによって、家風にそなへんために……」と筆がそれてしまったので、最後は「身には過分のわざとぞ思給る。」と、「さりながらさしも卑下すべからず。」といいながら、卑下のことばで結ぶ結果になったのであろう。

なぜ住吉神社に參籠したかについては、『正徹物語』が次のように伝えている。

俊成卿老後に成りて、さても明暮哥をのみ読みあて、更に当來の勤めなし。かくては後生いかならんと歎きて、住吉の御社に一七日籠りて此事を歎きて、「もし哥は徒ら事ならば今よりこの道をさし置きて一向に後世

の勤めをすべし」と祈念有りしが、七日に満ずる夜、夢中に明神現じ給ひて、「和歌仏道全二無」と示し給ひしかば、さては此道のほかに仏道を求むべからずとて、弥此道を重き事にし給ひし也。定家も住吉に九月十三夜が七日に満ずる日にあたる様に、参籠してこの事を歎き申されしかば、九月十三夜明神うつゝに現じ給ひ、「汝月明也」と示し給ひしより、さては此道かう也と思ひ給ひけり。(古典文学大系『歌論集』一八四ページ)

「汝月あきらかなり」は、汝の頭上に月は皓々と照らしているぞ。お前が歌道に精進していることは仏の教にそのまま合致するの意。『正徹物語』にある「和歌仏道全二無」の意味である。「冥の靈夢を感じ侍しによりて」は冥々うちの明神のおさとしの夢を感じましたので。「靈夢」は神仏のおさとしやお告げを見る夢。「見侍し」とはなく、「感じ侍し」とあるので、ここ「靈夢」は、はっきりと見たものではなく、漠として感じたものであることを知るが、それだけに、それは神秘的な陰影を深く蔵するものであったろう。「冥の」を添えたのはそのためか。「冥の」は冥々のうちの、暗くはつきりしない、の意。「家風にそなへんために」は、わが家の作風を完備させるために。歌道家としての御子左家の作風が仏の道からはずれないために、の意。「明月記」は定家の日記の『明月記』ではない。歌学書の『明月記』。その実体については、八島長寿氏は「歌論書明月記者」(『国語』昭和28・9)で、了俊の『言塵集』の「右初心の輩のために是までは注し付くなり。委細は宗匠によく尋ね申すべきなり。会の作法とて明月記にくはしく仰せられたるを御口伝を得べきなり。」(古典全集『言塵集』二五三ページ)の記事と、心敬の『ささめごと』の「さきに尋ね侍りし六義・篇序題曲流、なほおぼつかなき事残り侍り。先哲語り侍る、この分別あきらかならざらむ好士は、いかばかり玄妙の句を作り侍らんも、代々の集の趣、又他人の歌連歌わきまへ侍らんことおぼつかなしとなり。されば古今集にもむねと書きあらはし侍り。定家卿明月記などにも、こ

の両条の事を尽し給へりとなり。」(古典文学大系『連歌論集』一七三ページ)の記事を中心資料として、この記事と合致する現存類従本『愚秘抄』並びに現存二巻本『三五記』の下巻を『明月記』の実体と推測され、田中裕氏は「定家仮託書の批判」(『国語国文』昭和28・10)で、『明月記』は靈夢の願末を序におき、歌の善悪を判別するに足る秀歌を寛平以前の歌人の作品を中心に撰出したもの、あたかも後の『秀歌大体』の如きものか、乃至は若干の評注を挿んだものを根幹としていたであろうと推測されている。私は「愚見抄をめぐって」(『国語国文』昭和33・4)の中で、『明月記』の中心記事は特別な詠歌上の技法や注意などであったはずはなく、歌道精進と仏道修行と的精神的な葛藤と、それを「狂言綺語の誤を以って翻して讚仏乗の因となす」ことによつて、「歌道は我国の陀羅尼なり」へと超克して行く過程が中心記事をなすものと推測した。

或はたちながら案じ、ふしてよみなど、身を自在にしてよみつけぬれば、はれの時、法式たがひたるやうに覺えて、すべてよまれぬ事にて候。くせに成てはせんなき事にてぞ侍るべき(一三八・1〜3)

『愚秘抄』に興味ある具体例が記されている。

西行は毎度縁行道して嘯きてよみ習ひけるが故に、先年仙洞にて老若の勝負の御歌侍りし時、当座にて各心をつくしてよみあひしに、御敵方たるによりて、西行はやうのあんなる、外にいだすな、たてこめてよめやと勅定ありしは、縁行道の事をきこしめし及びける故にや。されば其時はそれ程におぼゆる秀逸なかりし也。和泉式部はひきかづきよみならひけるが故に、晴の時も顔を懐にひき入れてよみけるが、世にかたはしうなん見えけるとなん。又康資王母は暗き所にてよみならひけるにや、毎度灯をそむきて目をとちて案ぜられけるとなん。此等のためしみなくせにて侍ればかたはしかりぬべし。(『歌学大系』四卷三〇三ページ)